

外来受診三歳児と保健所健診三歳児の 聴覚障害疾患の相違

立木 孝¹⁾，小田島葉子¹⁾，村井盛子²⁾

【要約】：保健所健診による三歳児の疾患別受診率を、一般外来受診三歳児の疾患別受診率と比較検討することにより、三歳児健康診査の意義を確認した。

見出し語：外来受診三歳児、疾患別受診率

1. 目的

聴覚障害は外見上非常にわかりにくい障害であり、幼児期特に3歳以下の幼児においては、聴覚障害によって起こる二次的障害によって気がつくことが多い。また幼児の聴力検査は、子供の協力が得られにくいこともあり、なかなか正確なところがわかりにくく、今まで報告例も少なかったのが実状とおもわれる。今回我々は三歳児がどのような病状で耳鼻科を訪れることが多いのか、実際の外来受診状況を検討し、現行の三歳児聴覚健診の結果と比較検討した。

2. 対象および方法

平成元年4月から平成6年3月までの過去5年間に岩手医大耳鼻咽喉科一般外来を受診した三歳児 239例を対象とし、先に述べた平成2年

10月から平成6年3月までの3年6か月間の三歳児健診受診児15,088例と疾患別受診率、聴力レベル等につき比較検討した。

3. 結果および考察

1) 外来患者疾患別受診率

表1に対象 239例の疾患別受診率を耳、鼻咽喉頭、その他の部位別に分けて示した。耳疾患が全体の39.7%と約4割を占めており、中でも滲出性中耳炎が42件(17.6%)と、耳疾患の中では最も多く認められた。ついで急性中耳炎33件(13.8%)、外耳炎13件(5.4%)と続き、感音難聴は7件(2.9%)であった。尚、耳疾患以外では慢性副鼻腔炎、慢性扁桃炎、単純性言語発達遅滞などの疾患が多く認められた。

1)岩手医大耳鼻科 2)盛岡市立病院耳鼻科

表1. 疾患別外来受診率

(1989年4月～1994年3月、
三歳児 239名 264件 岩手医大)

部位	疾患	件数(件)	頻度(%)
耳 (39.7%)	滲出性中耳炎 (耳管狭窄症含む)	42	17.6
	急性中耳炎	33	13.8
	外耳炎	13	5.4
	感音難聴	7	2.9
鼻咽喉頭 (33.0%)	慢性副鼻腔炎	44	18.4
	慢性扁桃炎	18	7.5
	鼻咽頭異物	11	4.6
	アレルギー性鼻炎	6	2.5
その他 (31.0%)	単純性言語発達遅滞	35	14.6
	精神発達遅滞	14	5.9
	その他	25	10.5
正常		16	6.7

*複数回答あり (対239例)

2) 一般外来と三歳児健診での受診率の相違

この結果を、三歳児聴覚健診受診者の保健所統計による疾患別分類と比較し表2に示した。

一般外来においても保健所健診においても、滲出性中耳炎の割合が多く認められるが、一般外来での受診率17.6% に対して健診で検出される頻度が33.1% と高頻度であることがわかる。このことから、滲出性中耳炎の場合、難聴が軽ないし中等度であるため、聴覚障害に気づかず、健診で初めて指摘される例が少ないのではないかと推察される。

感音難聴については一般外来で7例、健診で2例検出されている。その聴力レベルを良聴耳の会話音域3周波数平均で比較し表3に示したが、一般外来を受診していない中等度難聴の例が健診によって検出されていることがわかる。また、三歳児健診で両側高度難聴児が一例見つかっているが、この例は前述したようにダウン症児であり発見の遅れた例である。(なお一般外来の軽度難聴例3例中2例は一側高度難聴の症例であり、他の1例は主訴が言語発達遅滞で受診した両側軽度難聴であった。)

このことから三歳児聴覚健診が中、高度難聴児の取りこぼしの防止に役立っているものと思われる。

表2. 疾患別外来受診率

一般外来と三歳児健診での受診率の相違

部位	疾患	一般外来		三歳児健診	
		件数(件)	頻度(%)	件数(件)	頻度(%)
耳	滲出性中耳炎 (耳管狭窄症含む)	42	17.6	88	33.1
	急性中耳炎	33	13.8	10	3.8
	外耳炎	13	5.4		
	感音難聴	7	2.9	2	0.8
鼻咽喉頭	慢性副鼻腔炎	44	18.4	35	13.2
	慢性扁桃炎	18	7.5	15	5.6
	鼻咽頭異物	11	4.6		
	アレルギー性鼻炎	6	2.5	7	2.6
その他	単純性言語発達遅滞	35	14.6	26	9.8
	精神発達遅滞	14	5.9		
	その他	25	10.5	12	4.5
正常		16	6.7	106	39.8

*複数回答あり (対239例) (対266例)

表3. 感音難聴例の聴力レベルの相違

聴力レベル(dB)	一般外来	三歳児健診
～30	***	
30～60		*
60～90	**	
90～	**	*
計	7例	2例

その他の疾患では一般外来でも健診でも大体同程度の受診率となっているが、正常例をみると健診での正常例が一般外来での正常例と比較して、かなり多いと思われる。この事は現行のアンケートによる健診での取り込みすぎがかなり多いことを示唆する結果だと思われる。

4. まとめ

平成2年10月から平成6年3月までの過去3年6か月間の三歳児健診受診児と、平成元年4月から平成6年3月の間に岩手医大耳鼻咽喉科一般外来を受診した三歳児の受診状況と比較検討した。

1) 一般外来三歳児受診状況を見ると、耳疾患が39.7%を占め、その中では滲出性中耳炎が17.6%と最も多く認められた。感音難聴は7件2.9%であった。

2) 保健所統計による疾患別受診率と一般外来三歳児受診率を比較すると、いずれも滲出性中耳炎が多く認められたが、健診での受診率が高く、また一般外来を受診しなかった中等度、高度難聴例も三歳児健診で発見されており、三歳児健診の意義が再確認された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



[要約]:保健所健診による三歳児の疾患別受診率を、一般外来受診三歳児の疾患別受診率と比較検討することにより、三歳児健康診査の意義を確認した。